

2026年04月28日（火）【外為L a b】松田哲

タイトル：【ドル円は、ボックス相場を形成中】

米国とイスラエルが、イランに対して戦闘を開始したのが、2月28日（土）だったので、ちょうど2か月の間、戦争状態が続いている。

現在は停戦状態だが、今後どうなるのか、見通しは不明のまま。

+++++

戦闘が開始されてからのドル円相場を見るならば、カレンダーでは、3月2日（月）がその始まりと言える。

3月2日（月）から現在までのドル円の値動きは、概して、高値160円、安値157円程度のボックス相場を形成中、と言える。

一時的に、160.00を上に抜けた場面もあるが、160円近辺、ないしはそれ以上になると、日銀の介入警戒感が強くなり、その都度、ドル円は下落に転じている。

それで、ボックス相場への対応策を述べておこう、と考えます。

+++++
+++++

ボックス相場（持ち合い相場）の格言に、以下のものがあります。

「相場持ち合いとなれば、同数の取り合いなり。逆向かいを可とする」

まず、この格言の意味を考察しましょう。

「持ち合い相場」が続くと、市場参加者の考えが、ブル・ベア均衡するようになります。

ブル派（相場が上がると考えている人たち）は、価格が上昇すると、さらに買う行動に出ます。

思っていた通りの、いかにも強い相場つきに見えるので、買いで付いていきたくなるのです。

しかし、そこは逆向かって、売ってもいいですよ。

ベア派（相場が下落すると考えている人たち）は、価格が下がると、「ほれ、見たことか」といわんばかりに売ります。

しかし、そこは逆方向かって、買ってでもいいですよ。

この格言は、そういった意味です。

+++++

通常の相場では、「逆張り」は、あまり推奨されないのですが、この格言では、「逆張り」を「可」としています。

それは何故でしょうか？

相場の動きは、結果として「持ち合い相場」と気が付くのであり、いつ何時、持ち合い相場を放れるのかは、誰にもわからないことです。

別な言い方をすれば、「この相場はまだ、持ち合い相場が続くのだ」と、自ら判断した場合にのみ通用する格言なのです。

相場の格言は正しいことが多いのですが、まず、前提条件がそろわないと当てはまりません。

ですから、この格言は「逆方向かいを可とする」という表現をしています。

「やりたければ、そのようにやってもいいですよ」といったニュアンスなのです。

言外に、

「やらなくてもいい」

「場合によっては、いつ何時、相場が放れるかわからないから、やらない方がいい」

といった意味合いが含まれているのです。

「このようなときには、このように対応しなさい」

という強いニュアンスの場合には、

「逆方向かいをするべし」

とか、

「逆方向かうべし」

といった表現になるはずですよ。

+++++

「膠着（こうちやく）相場」というか、「ボックス相場」というか、そのような値動きをしているときにも、利益を追求しなければならない場合のアドバイス（格言）だと思います。

+++++

しかし、「逆向かいを可とする」相場で、実際に「逆張りオペレーション」を行った場合には、最後に、どちらかに放れるところで、必ず「損切り（負け）」になります。

ですから、「逆張り」で何往復とれるのかが、損益の分かれ目になります。

オプション・プレイヤーがストライク・プライスを中心に、売買を繰り返すオペレーション（リボルビング・オペレーション）をよくやっていますが、その技法も、この格言にのっとったものです。

+++++

+++++

(2026年04月28日東京時間12:00記述)